

ほうしゃのう女 | 生子達矢

小学二年生の秋、一人の女の子が僕のクラスに転校してきた。彼女は折り紙がとても上手で、当時折り紙が大好きだった僕に、色々な折り方を教えてくれた。しかし、彼女がどこから来たのかは誰も知らなかった。自己紹介のとき、先生も彼女自身も、それには一切触れなかったからだ。それから三ヶ月が過ぎ、クリスマスが近づいたある日、彼女の靴がゴミ箱に捨てられているのが見つかった。クラスでは学級会が開かれ、誰がそんなひどいことをしたのか話し合った。たしか、五時間目が終わったあと、日が沈むまで続いたと記憶している。彼女は明るく、優しい子だった。いじめられる理由なんて、僕には思い当たらなかった。しかし、翌朝——終業式の日、彼女の机に「放射能女」という落書きがされていた。その文字を見た瞬間の衝撃を、僕は今でもはっきりと覚えている。クラスの誰かが、落書きを見て笑った。「放射能がついとる人ってほんまに光るんかな」と、面白がるような声が上がった。「夜になったら光るんちゃう？」——悪ふざけと無邪気な残酷さが混ざった、子ども特有の笑い声が広がる。その瞬間、クラスの空気は決まった。彼女は「そういう存在」として扱われるようになった。冬休みが明けたある朝、彼女が折った美しい折り紙が、あの落書きとともにゴミ箱に捨てられていた。その日の放課後、僕は彼女が福島から引っ越してきたのだと知った。そう——彼女は、あの原発事故のあった福島から来た子だったのだ。

彼女は全てを失ってやって来たのではなかったのだから、今になってふと思う。震災の日、彼女は家を失い、学校を失い、大切な友達や、もしかすると家族すらも失ったのかもしれない。突然奪われた日常。すべてが津波に飲み込まれ、放射能という見えない恐怖が街を覆った。避難所での日々を経て、新しい土地で、新しい生活を始めようとした——それははずだったのではないか。

けれど、新天地で彼女を待っていたのは、新しい希望ではなく、新たな苦しみだった。

「放射能女」

そのたった四文字が、彼女のすべてを否定した。過去も、現在も、未来も。まるで、ここにいてはいけないとでも言うように。

彼女が福島から来たことを知った瞬間、僕の心に言いようのない不安が広がった。「放射能」という言葉が、子どもながらに見えない脅威のように思えたのだ。もし彼女と一緒にいることで、自分まで「汚染された」と思われたら——そんな漠然とした恐怖に駆られ、僕は少しずつ、彼女と距離を置くようになった。彼女へのいじめは次第にエスカレートしていった。机には何度も「放射能女」と書かれ、消しても、机を取り替えても、また繰り返された。それでも僕は、何も言えなかった。もし彼女をかばえば、次は自分が標的になるかもしれない。そんな思いが、僕を黙らせた。ある日、彼女の筆箱が開けられ、消しゴムや鉛筆が床にぶちまけられていた。それを見つけた誰かが言った。「これ、拾ったらヤバくない？」。まるでそれに触れることで、自分まで「汚染」されるかのように。皆、遠巻きに見ながら、誰も拾おうとはしなかった。僕も——彼女自身でさえも。彼女は、その場でただ立ち尽くしていた。表情はあまり覚えていない。そして二ヶ月後、彼女はまた転校していった。理由は分からない。家の都合だったのかもしれないし、あるいは——。けれど、今になって思う。彼女を本当に苦しめたのは、あの落書きを書いた誰かだけではなかった。何もせず、ただ見ているだけだった僕もまた、加害者の一人だったのかもしれない、と。

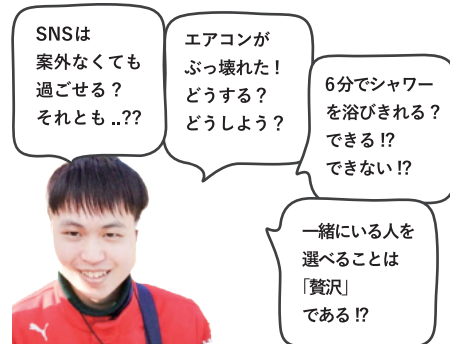


WEB掲載ページはこちら

グランピングの4つの実体験

「当たり前」だと思い込んでいたかもしれないこと | 松林勇希

2025年2月、高校の同級生2人と滋賀県高島市へグランピングへ行った。道中は山手線ゲームをして、楽しむ間に到着するぐらいだった。私を含めみんな楽しんでたあの時間が今も脳裏に焼き付いている。さて、ここでは、普段直面することがほとんどない体験をした。そこで、自分のグランピングで何があったかを思い出し、「当たり前じゃなかったかもしれないこと」を書き出してみることにした。



「当たり前」が「当たり前」であるのは、実は全てにおいて「不自由なく」恩恵を受け続けているからこそなのである、と私は考える。そしてひとつ状況が変化すれば「当たり前」ではなくなる。記事の中で4つの経験を書いていて私が感じたのは、世の中が作り出してくれていた恩恵や便利の数々だった。それに加えて普通の生活、健康で過ごせることの有り難さだった。



記事全文はこちら

新記事を順次投稿しています。

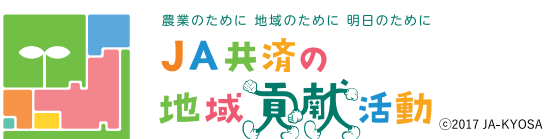


取材協力 (50 音順・敬称略)

家 彰利、前田 ゆかり (たつの市役所)
木南 晴太 (東播磨民局)
寺尾 仁志 (human note)
西馬 きむ子
藤本 悠輔 (神戸県民センター)

協賛

JA共済連 兵庫



2025年8月31日発行

僕たちの言葉で「あの日」を「これから」を考える。

リメンバー117プロジェクト
阪神・淡路大震災30年

阪神・淡路大震災を経験したことのない若者たちが「あの日」と「これから」を考えるプロジェクト

大怪我をして痛みと孤独を味わった。就活で大きな不安を抱えた。そんなときに地震があったらどうなってしまうのだろうか。
——山崎天智

アルバイトとボランティアの違いって何だろう。神戸ルミナリエで考え始めたお金じゃない価値と、責任感。
——野路美緑

たくさんの異文化が集まる神戸が好き。何があっても生業や文化を守ってきた職人さんの話を聞きたい。
——田村笑梨

ずっと合唱をやってきた私。音楽の力で人を救えるなら。
——金原美蕾

「当たり前」だと思っていたこと、けっこうたくさんあった。グランピング旅行で気がついた僕の「当たり前」。
——松林勇希

視覚障がい者の祖父と祖母。もし、地震があったなら。初めて考えた障がい者の支援。
——楠本明日香

母と祖母のつくったご飯が大好き。避難所の炊き出しをしていた方はどんな気持ちだったんだろう。
——朝原令

「ほうしゃのう女」と机に書かれた小学生の時の転校生の彼女について。
——生子達矢

ABOUT | リメンバー 117 について

リメンバー117は阪神・淡路大震災を経験したことのない若者たちによる、阪神・淡路大震災WEBメディアプロジェクトです。震災25年の時にプロジェクトが開始し、30年を迎えた2025年に再始動。生まれる前の出来事を、自分たちなりに頭と体と心を使って考え、記事を書いています。

チーム・リメンバー 117

【取材チーム】

朝原 令 | 猪原 静 | 大島 かれん | 桂 光輝 | 金原 美蕾 | 楠本 明日香 | 生子 達矢 | 田村 笑梨 | 野路 美緑 | 濱崎 亮太 | 松林 勇希 | 山崎 天智

【サポーター】

有田 佳浩 (兵庫県広報プロデューサー)
桂 知秋 (兵庫県メディアディレクター)
福島 由衣 (兵庫県メディアディレクター)
加悦 竜馬 (兵庫県防災支援課)
北野 隼也斗 (兵庫県防災支援課)
満尾 遼太郎 (兵庫県防災支援課)
渡辺 顕
鶴留 彩花

事務局・お問い合わせ

ひょうご安全の日推進県民会議事務局
(兵庫県危機管理部防災支援課内)
〒650-8567 神戸市中央区下山手通 5-10-1
TEL : 078-362-9062
FAX : 078-362-4459
HP : https://19950117hyogo.jp/
E-MAIL : bosaishien@pref.hyogo.lg.jp

一般社団法人 大学コンソーシアムひょうご神戸

〒651-0072 神戸市中央区脇浜町 1-2-8
兵庫国際交流会館 1F
TEL : 078-271-0233
FAX : 078-271-0244
HP : https://consortium-hyogo.jp/
E-MAIL : info@consortium-hyogo.jp



お金じゃない 価値って なんだろう？

バイトとボランティアを
比べてみて気づいたこと――
野路美緑

――藤本悠輔さん

――野路美緑

「アルバイトとボランティアの違いって一体何だろう??」。

神戸ルミナリエの募金ボランティアでの経験からこの疑問を持った私。ルミナリエから半年ほど経った2025年6月、募金ボランティアのサポートをしてくださっていた県庁職員の藤本さんと久しぶりに会って、「アルバイトとボランティアの違い」について話し合いました。

他にもこんな記事を
制作中です！

WEB「リメンバー117」
でお読みください。



ずっと合唱を
やってきた私。
音楽の力で人を
救えるなら。

金原美蕾

音楽の力ってすごい。でも、音楽は人を救えるのだろうか？ 歌で震災の記憶を繋いで

いくことはできる？

震災祈念コンサートを開催するhuman note代表・寺尾さんにお話を聞きに行きました。



◀記事全文
はこちら

異文化が集まる神戸
が好き。
生業や文化を守
ってきた職人さんの
話を聞きたい。

田村笑梨

神戸にはいろんな異文化が残っている。職人さんたちは、震災当時どうしていたのだろう？被害にもくじけず文化を守ってきた人たちにお話を聞いてみたくて、まずは神戸の老舗を巡っています。



◀記事全文
はこちら



自己犠牲と思って
ボランティアしたことはない

私にとってはどちらも楽しくて、そんなに違いが分からない……。そう話してみると、藤本さんは「お金以上に価値があるものを見つけられるのが、ボランティアなんじゃないかな」と答えてくださいました。

私は現在、就職活動中です。面接でボランティアをしていました、という「意識高いね」とか、「そんなに自分を削らなくてもいいのに」と言われたことがあります。でも、自分ではそうでもないのに、と思っていました。はたから見たら「意識高い」と思われるのかもしれませんが私としては自分が楽しくてやっていること。ルミナリエも寒かったけど、楽しかったんです。(中略)とはいえ、自分がいいことだと思っていることが相手にとってもそうとは限らないですね。特に災害ボランティアなどでは、他所者が何しに来たんだ！と怒られてしまうことも少なくないです。

藤本さん「そういう怒られるリスクもあるからこそ、ボランティアは自己犠牲ではやりたくないという気持ちはあるよね。自己犠牲の精神でやっていて怒られたらなんで？という気持ちになってしまう。たとえば道にゴミが落ちていて、汚いなと感じて拾って帰る行為は、自分がしたいからやっただけというか。個人的にゴミ拾いとか人助けとかをやって、別にやってくれなくてよかったのに、と言われてもそれはそれで仕方ないかなと」。(中略)

私も相手の受け取り方は相手に任せるスタンスです。ただ、自分に余裕が無いと、「やってあげてる」という感覚になってしまうこともあるかもしれません。もしかししたら、詰め込みすぎずに余裕を持つことが、ボランティア活動をする上で大切なかもしれないと、改めて考えました。



◀記事全文はこちら



◀アルバイトとボランティアの違いについて考えたきっかけの話はこちら

誰ひとり取り 残さない避難 を目指して

災害時、障がいを持つ方をどう助けるか。たつの市役所に聞く | 楠本明日香

地震が起こった時、自分なら何をしよう？(中略) そうですね、祖父と祖母は目が見えないって父が言っていたな。障がい者は災害が起こった時、どうなるのだろう。私はどうやって助けてあげられるのだろう。この取材はそんな思いから始まった。今回は兵庫県たつの市役所危機管理課の家さん、福祉課の前田さんに取材させていただいた。

「気が引けるから、地域の支援者にはよう声かけられへん」～避難計画と地域のつながりの希薄化～

(中略) 兵庫県たつの市では、「登録台帳」というものが要支援者1人1人に対して作られている。簡単に言うと、「登録台帳」には緊急連絡先やその人独自の避難計画、災害時に支援してくれる人の情報などが載っている。障がいは1人1人違ってそれぞれが求める支援の形は様々である。「登録台帳」は個々に寄り添ってくれているものだとは私は感じた。

だが、同時に現場では、上手くいかないこともあるようだった。「登録台帳」では、要支援者にそれぞれ“地域支援者”と呼ばれる人を少なくとも1人は登録することになっている。災害時に避難をサポートしてくれる役割の人だ。私はふと、自分が要支援者になったとしたら誰に地域支援者になってもらうだろうとおもった。この春に引っ越してきたばかりのマンションには気を遣わず頼れる人がいない。それどころか名前すら知らない人ばかりだ。そんな人に地域支援者になってほしいと頼める勇気が私にはない。前田さんも、「地域コミュニティの希薄化が進んでいて、障がいを持つ方が遠慮がちになり苦慮している」と話してくれた。コミュニティがよく形成されている地域であれば、「私が地域支援者になってあげるよ」と積極的な声掛けがありそれがスムーズに受け入れられやすい一方で、あまり地域のつながりがないところでは、「気が引けるから、地域の支援者にはよう声かけられへん」

「どうせ生きてんやったら、楽しく生きた方がいい」

被災、留年、就職を立て続けに経験した方に
取材して、学べたこと | 山崎天智

私は、去年の夏に前十字靱帯を損傷し、好きなサッカーが半年間出来なかった経験があります。また、現在就活中で、人生の岐路に立たされているといった漠然としたプレッシャーを感じています。これらの経験に被災が重なったら、自分だったら耐えられないと思いました。実際に被災当時に、負傷中または就活中だった方はどうだったんだろう。話を聞いてみたいと探していたところ、東播磨県民局副局長の木南さんが快諾してくださいました。

辛いことがあっても人生を楽しむための、考え方と軸

大学4年生の時に阪神・淡路大震災に遭った木南さんは、被災直後の3月に留年が決まって大学院進学を断念し、急遽就職活動をするようになったそうです。(中略) 被災、留年、就職。私が同じ立場なら、凹んで立ち直れないと思うのですが、なぜ落ち込まずにいられるのですか、と木南さんに聞いてみました。すると木南さんは、「なんか考え方一つやな。

「誰に頼めばいいかわからへん」と言って、要支援者が遠慮するケースも多いらしい。「何かがあったときは地域ぐるみで助け合ってくださいね」ということをお話しすると、いや、じゃあもういいわってなっちゃうんで、そこがもどかしくて」と前田さんはそう本音をこぼしていた。

地道に、ちょっとずつでも。
～遠慮から生まれる、要支援者とのすれ違いを埋めていく～

(中略) 現状、行政が努力をしても、「登録台帳」の勧めを断る人は多いそうだ。「自分の情報を教えたくない」、「立ち入ってほしくない」、断られる理由は山ほどある。でも、災害が起こったら、遠慮なんて言っていられないと私は思う。前田さん・家さんや民生委員さんが日々感じるもどかしさと、要支援者の方々が抱える思い、それをひとつひとつ紐解くためにみなさんが積み重ねていく頑張り、話を聞きながら感じた。



◀記事全文はこちら



◀取材前に、視覚障がい者の祖父母について父に聞いてみた話はこちら



そういうふうに山崎さんみたいに考えるか、私みたいに考えるかっていうのは、ほんま紙一重やと思う。やっぱり、どうせ生きてんやったら、楽しく生きた方がいい」と話されました。

木南さんは「ずっと登山をしてきた自分には山登りっていう軸があるとは思います。自分の人生において、それがつらい時の逃げ場にもなるし。なんか一本足より二本足で立ってるっていう強さがありました。一番悩んだ就職1、2年目は、一番山登りをした時期でもあります」とおっしゃっていました。

被災してショックを受けたり、就活で不安を感じることは、やはり避けられないことだと思います。しかし取材をして、周りとのつながりや、自分の軸を意識することで、そうした精神的負担はやわらぎ、前向きに生きられるのではないかと感じました。私が前十字靱帯を損傷して、なかなか立ち直れなかったことと、就活で不安を感じることは、共通した要因があると考えます。まず、「自分だけでふさぎ込んでしまったこと」。そして、「軸を見失ったこと」です。負傷では軸の「サッカー」ができなくなったこと、就活では選択肢の多さが原因で、やりたいことの軸を見失いました。もし私が被災しても、周りとのつながりを意識して、辛い時もよりどころになる「自分の人生の軸」を見失わないことで、木南さんのように前向きに生きようと思います。



◀記事全文はこちら



たとえばこんな
ふう。朝原令の場合



リメンバー117では、「あの日」を知らない私たちの世代が、自分たちなりに頭と身体と心を使って考えて、記事をつくっています。

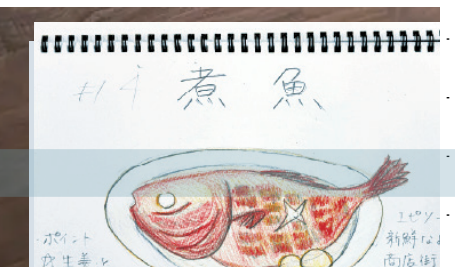
5月

まずは自分の興味・関心を考える。家で食べるご飯が大好き。だからこそ、被災時のご飯について考えることに。



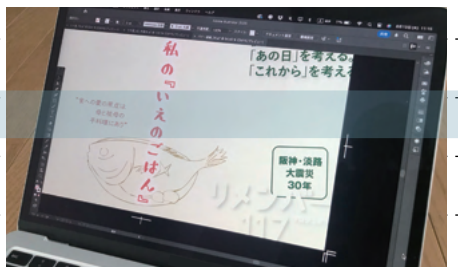
6月

「自分ごと」ととことん深掘り。母と祖母がつくる料理への愛をエッセイに。



7月

エッセイ完成。振り返りとして「食えることへの愛」を手に、取材を企画。



8月

震災当時、避難所で炊き出しを続けた農家に取材。食えること、助け合うことの大切さと難しさについて語り合いました。



出来上がった
記事はこちら

